（岩倉紙芝居館古典館<http://hjueda.on.coocan.jp/koten/koten.htm>）　宰主　上田啓之

『荀子』議兵篇に、臨武君の言として「孫（子）・呉（子）も之（勢利、変詐、感忽、悠闇）を用いて、天下に敵無し」とあり、『韓非子』五蠧篇には、「孫・呉の書を蔵する者は、家ごとに之れ有り」、さりとて兵は弱いと嘆いており、戦国時代に広く普及していたとされる。司馬遷は「孫子・呉起列伝」を著し、呉王の闔閭（こうりょ、在位BC514-496）に仕えた斉人の孫武、その百年後の子孫、斉の田忌に仕えた孫臏の事績（桂陵の戦BC353、馬陵の戦BC341）、孔子の高弟の曾子の弟子であり、後に魏の文候（在位BC445-396）、武候（在位BC395-370）に仕えた衛人の呉岐の事績を記した。『漢書』芸文志・兵権謀家類には、『呉孫子兵法』82巻・図9巻、『漢書』30巻・志第10に「斉の孫子89編、図4巻」とあり、 顔師古がこれに「孫殯」と注 している。現テキストは13編であり、魏の曹操（武王）が編纂注した『魏武注孫子』による。
1972年、山東省銀雀山の前漢時代の墳墓から『竹簡孫子』や『孫殯兵法』の竹簡が出土し、『呉孫子兵法82巻・図9巻』と『斉の孫子（孫殯）89編、図4巻』は別物で、孫殯の兵法書は伝わっておらず、『呉孫子兵法』が継承されていることが判明したそうである。孫武の記したものが、後継者により82巻・図9巻に膨れあがり、曹操が基本となる部分に簡略化したとされる。続日本記、天平宝字四年（760年）十一月丙申条に、「舍人の春日部三関に刀を授け、中衛舍人土師宿禰関成等六人を大宰府に遣はし、大弐吉備朝臣真備に就かせ、諸葛亮八陳と孫子九地及び結営向背を習はしむ」とあり、「孫子」はこの時代から我が国でも読まれていた。

　　The Use of Spies

、、、、、、、、、、、、、、、、、、　孫子曰く、およそ師を興（おこ）すこと十万、出征（しゅっせい）すること千里なれば、百姓（ひゃくせい）の費（つい）え、公家（こうか）の奉（ほう）、日（ひ）に千金を費（つい）やし、内外（ないがい）騒動（そうどう）し、道路に怠（おこた）り、事（こと）を操（と）るを得ざる者七十万家（しちじゅうまんか）、相（あい）守ること数年、もって一日の勝（しょう）を争う。しかるに爵禄（しゃくろく）百金を愛（おし）みて敵の情（じょう）を知らざる者は、不仁（ふじん）の至（いた）りなり。人の将（しょう）にあらざるなり。主の佐（たすけ）にあらず、勝（しょう）の主（しゅ）にあらず。
■内外騒動　曹操は、「古（いにしえ）は八家が鄰を為し、一家が從軍せば、七家が之を奉（まかな）う。十萬の師を舉げれば、耕稼（耕作稼業）に事（つか）ざる者、七十萬家」とする。井田の法に基づく。従軍一家の食糧装備を七家で分担して供給、運搬する。■怠dàiは、疲倦pí juàn（こころが疲れる）、疲累pí lèi（疲れがたまること）■操cāoは、ここでは、従事、掌握すること。■日に千金、一年で約36.5万金、三年で百万金以上、一日の戦いに費やす出費は莫大。■敵の情を知る、敵将の策を知り、敵の不和を知り、爵禄を以て寝返りを策し、これを無力化する、戦う前に勝利の道筋を立てる出費を惜しむ、勝つ算段をせずして兵を戦わすは不仁。兵を帥（ひき）いる将軍に非ず。君主を輔佐することが出来ず、君主を勝者とすることもない。

、、、、、、、、、　ゆえに明君（めいくん）賢将（けんしょう）の動きて人に勝ち、成功すること衆に出（い）ずるゆえんのものは、先（さき）に知ればなり。先（さき）に知る者は鬼神（きしん）に取るべからず。事（こと）に象（かたど）るべからず、度（ど）に験（けみ）すべからず。必ず人に取りて敵の情（じょう）を知る者ものなり。
\*1\*2
■賢将を将とするのが明君。先知するのが賢将。■動dòng\*1は、童tóng（奴）と力lì（耒）からなり、奴に耕作させること、働が原義。説文では、「作なり、力に従い重声」とし、力を筋力、作は起なりとしている。童\*2は目の上に辛（入れ墨）があり東（橐；ふくろ）と土の錘（おもり）のついた奴隷が原義。人は他人のことであり、事を起こして人に勝つ。成功が衆人に抜きんでる。■先知とは敵情を先知すること。鬼神に取るとは卜占して知ろうとすること。象於事とは似たような事象から推測をすること。験於度とは軍勢の数や質、地形、天候などの条件を調べること。かくなることで判断をしてはいけない。必ず、人（間者や敵情に詳しい者）の報告により敵情を確認しなければならない。

、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、　ゆえに間（かん）を用（もち）うるに五あり。因間（いんかん）あり、内間（ないかん）あり、反間（はんかん）あり、死間（しかん）あり、生間（せいかん）あり。五間（ごかん）ともに起こりて、その道を知ることなき、これを神紀（しんき）と謂う。人君（じんくん）の宝なり。因間（いんかん）とはその郷人（きょうじん）によりてこれを用（もち）うるなり。内間（ないかん）とはその官人（かんじん）によりてこれを用（もち）うるなり。反間（はんかん）とはその敵の間によりてこれを用（もち）うるなり。死間（しかん）とは誑事（きょうじ）を外（そと）になし、わが間（かん）をしてこれを知らしめて、敵の間（かん）に伝うるなり。生間（せいかん）とは反（かえ）り報（ほう）ずるなり。
\*1\*2\*3\*4\*5\*6
■因yīn\*1は、囗guóと大dàiからなり、大は人が仰臥する形、□は茵yīn（寝臥する所、坐す敷物）、日常に用いるものが原義、それによること。囗を地域・国とし大dàで、区域を拡大するともされる。ここでは郷人とみており、□を地域、大を人としている。土地の状況を知る。■内nèi\*2は、冂と𠆢からなり、家屋の入り口の形が原義。内と入は通用する。内間は敵の宮廷に入る間者。■反fǎn \*3は、厂hǎn（厓）と又yòu（手）からなり、厓下の聖所（土神）を手にかける、反逆の義。反間は背く間者であり、敵の間者や官吏などを厚遇して味方にすること。■誑kuángは、言と狂からなり、狂kuáng\*4は、犭quǎn（犬）と㞷huángからなり、㞷は説文に、「艸（草）木妄りに生へるなり」とあり、狂は犬が何かに取り憑かれた様であり、誑は言葉が常軌を逸している様。誑事は相手を騙す情報。■外wài\*5は、夕xīと卜bǔからなり、卜は早朝に行うのが常であるが、夕方に行うのを外（はずれ）るとする。また、卜は亀の腹甲、外骨を用いるので、外（そと）となる。誑事を内から外にし、敵方に居る我が間者に知らしめ、敵の間者がその情報を信用して動き、敵が大きな損害を被るならば、我が間者は殺されることになる。■生shēng\*6は、説文に、「進なり。艸木の生えて土上に出るを象（かたど）る」とある。生間は敵という土壌の中で発芽して生育している草のごとき者。進（たてまつ）られた供物のごとき者。人知れず活動している間者、あるいは、双方にとってのホットラインのごとき間者。

、、、、、、、、、、、　ゆえに三軍の事（こと）、間（かん）より親（した）しきはなく、賞（しょう）は間（かん）より厚（あつ）きはなく、事（こと）は間（かん）より密（みつ）なるはなし。聖智（せいち）にあらざれば間（かん）を用（もち）うることあたわず。仁義（じんぎ）にあらざれば間（かん）を使うことあたわず。微妙（びみょう）にあらざれば間（かん）の実（じつ）を得ることあたわず。微（び）なるかな微（び）なるかな、間（かん）を用いざるところなきなり。間事（かんじ）いまだ発せずしてまず聞こゆれば、間（かん）と告（つ）ぐるところの者とは、みな死（し）す。
\*1 \*2\*3\*4\*5\*6
■親qìng \*1は、亲qīnと見jiànからなり、亲は位牌のこと、見る位牌とは親（おや）が原義。ここでは親（した）しいこと。三軍とは全軍のこと。君主にとって、全軍の中で一番親しい者が間者とする。■密mì\*2は、宓mì と火huǒ からなり（山とみられるが元来は火）、宓は宀miánと必bìからなり、廟中に鉞（まさかり）戚（まさかり）等を奉じて安寧を求める儀礼である。密は更にそれを火で浄める儀式で、厳重で秘かにおこなわれた。■間jiānの本字は閒\*3で、説文は、「隙なり、門に従い月に従う」とし、夜に閉めた門から見える月、その隙とするが、古くは月ではなく肉とし、門中に肉をおいて祀り安静を祈願する、あるいは動勢を察する意に用いた、あるいは、月ではなく仆、外\*4とするものがあり、外族が来服するともされた。間者は、君主の意向に最も近く、相対する人と人の機微の隙間からその意を察す能力のある者であり、君主がその者を用いる器量があれば、安寧を保つことができる。■微wēi\*5は、彳chì（道路）とからなりは媚蠱（びこ；虫を使う呪詛）をなす巫女（ふじょ）を敺（う）って、その呪能を失わせること、微はそれを路上で行う儀式。敵地に入るに敵の呪詛を弱め、あるいは無くすために、自軍の巫女を殴打する。かすかにする、あるいはなくすこと。間者が敵となるは紙一重、それを保つものは聖智と仁義。■智zhì\*6は、矢shǐ、干gān（盾）、𠙵からなり、この矢と干は聖器として誓約に用いられ、𠙵には誓約の詞が納められており、元来は神に誓約すること。知に干が加えられたものが智。君主と間者の間では、信頼関係を損ねる工作が仕掛けられるのが常であり、維持するのは簡単ではない。君主が仁を果さないならば、間者が義を果すこともない。■間事未發而先聞者とは間者から秘かに情報が漏らされている証拠であり、君主は敵の術中にある。

、、、、、　およそ軍の撃（う）たんと欲するところ、城の攻（せめ）んと欲するところ、人の殺（ころ）さんと欲するところは、必ずまずその守将（しゅしょう）、左右（さゆう）、謁者（えっしゃ）、門者（もんじゃ）、舎人（しゃじん）の姓名（せいめい）を知り、わが間（かん）をして必ずこれを索知（さくち）せしむ。
\*1
■守shǒu\*1は、宀mián（廟屋）と、寸cùn（手）からなり、廟屋のなかでことを執ること。丶を干gān（盾）とするものもあり、武器で守る、王身あるいは聖所を守ることとされる。守将はここでは都市や城や野営を守る将軍。■左右は、ここでは守将の近臣達。■謁者は、ここでは賓客や使者を守将や左右に取り次ぐ者。■舎人は、ここでは外来者を泊める館、宿舎、野営所を管理・警護する責任者であろうか。■敵国に入る場合に宿泊する館、城の門、謁見係となる侍従、側近などの姓名を特定しておくことを必須としている。春秋時代の宋の宰相華元が夜に楚の将子反の寝所に忍び込み、交渉を行うことができたのは、これによるとされる。

、、、、、、、、、、、必ず敵人の間（かん）の来たりてわれを間（かん）する者を索（もと）め、よりてこれを利し、導（みち）びきてこれを舎（しゃ）す。ゆえに反間（はんかん）は得て用（もち）うべきなり。これによりてこれを知る。ゆえに郷間（きょうかん）・内間（ないかん）、得て使うべきなり。これによりてこれを知る。ゆえに死間（しかん）、誑事（きょうじ）をなして敵に告（つ）げしむべし。これによりてこれを知る。ゆえに生間（せいかん）、期（き）のごとくならしむべし。
\*1\*2
■舎shè \*1は、（把手のついた針器）と、𠙵（祝禱を収める容器）からなり、針器で容器を突き通す形であり、呪能を破ることから捨てることの初文（字統）。祝禱の書の内容を外に宣（の）べることから命令を発すること。与える義ともなる。後、宿舎の義となる。探索して厚遇し宿舎を与えるのは、そこでコミュニケーションを図るため。相手の心に針を刺し、中の秘密を引き出し、味方とすることもあれば、捨てることもある。■敵の來間を反間とすることができれば、敵の郷間や内間で協力するものを得ることが出来る。■期qī\*2は其と月からなっているが金文では. 其と日からなっている。其は箕 ji（穀物の選別の際に殻や塵を取り除くための容器）を振ってもみ殻を選別する様であり、期はあることが成る特定の日時をいう。一周期の期は ji。ここの期は動詞であり、期限を定めたことが成ること。

、、、、　五間（ごかん）の事（こと）、主（しゅ）必ずこれを知る。これを知るは必ず反間（はんかん）にあり。ゆえに反間（はんかん）は厚（あつ）くせざるベからざるなり。
■能く反間を得れば、地に潜み、天空から敵を見るが如し。己が間と反間の信を得ることは極めて難しい。

、、、、、、、、、　昔、殷（いん）の興（おこ）るや、伊摯（いし）、夏（か）にあり。周（しゅう）の興（おこ）るや、呂牙（りょが）、殷（いん）にあり。ゆえにただ明君（めいくん）賢将（けんしょう）のみよく上智（じょうち）をもって間（かん）となす者にして、必ず大功（たいこう）を成なす。これ兵の要（かなめ）にして、三軍（さんぐん）の恃（たの）みて動（うご）くところなり。
■伊摯は伊尹（ゐいん）のこと。史記、殷本紀に、「伊尹、名は阿衡（あかう）。阿衡、湯（成湯）に干（もと）めむと欲すれど由無し、乃ち有莘（いうしん）氏の媵臣（嫁の付き人）と為り、鼎俎（ていそ；かなえとまないた）を負ひ、滋味を以て湯を說き、王道に致せり」とある。呂氏春秋、本味によれば、食の素材は万別のくせがあるが、水や火加減、甘酸苦辛鹹の調味料により、味を調（ととの）える。素材を権力によって無理に集めてはならない。それぞれの素材の用い方調理法を習得するべく、諸豪族の用い方、役割を付与すれば、天子となることができ、物産も各地から自ずと集る。老子は、「大国を治むは小鮮（小魚）を烹（に）るが若し」とした。五間により、相手の料理法を整えることが肝要とする。■呂牙（呂子牙）は呂尚、太公望のこと。史記、斉太公世家によれば、周の西伯（文王）が殷の紂王に拘束された時に、美女・奇物を紂に献上して救出し、文王には公平な政を求め、自らは謀を以て、天下の三分の二を治め、武王の時に紂を討つ。斉の営丘に封ぜられると、その地の俗に合わせ、礼を簡略にし、商工の業に通じ、魚・塩の利を計り、人民が集ったとする。文王にして初めて呂尚を用いることができた。■伊尹や呂尚は宰相、軍師との印象が強く、上智の間者としており、所謂間者のイメージからは遠い。

了　2021.03.27

**宋刊十一家註孫子**（[HP](https://ctext.org/wiki.pl?if=gb&chapter=745776#%E5%8D%81%E4%B8%80%E5%AE%B6%E8%A8%BB%E5%AD%AB%E5%AD%90%E5%8D%B7%E4%B8%8B%E7%94%A8%E9%96%93%E7%AF%87)）（注釈者のプロフィールについては、古典ぱん（[HP](https://k10p.net/?p=1253)）に詳しい）

曹操李筌曰く、戰は必ず間諜を用い、以て敵の情實を知るなり。
張預曰く、素より敵情を知らむと欲（す）は、間に非ずして可ならざる。然り間を用う道は、尤（とりわけ）須べからく微密たるべし、故に《火攻》に次ぐなり。

（孫子曰：凡興師十萬，出征千里，百姓之費，公家之奉，日費千金，內外騷動，怠於道路，不得操事者，七十萬家）。
曹操曰く、古（いにしえ）は八家が鄰を為し、一家が從軍せば、七家が之を奉（まかな）う。十萬の師を舉げれば、耕稼に事（つか）ざる者、七十萬家。
李筌曰く、古は一家の兵を發（おこ）すは、則ち鄰里三族が共に之を資（あた）う、是を以て耕作を得ざる者は七十萬家、而して十萬の衆に資（あた）わん。
杜牧曰く、古は一夫の田は一頃、夫れ九頃の地、中心の一頃に、井を鑿（うが）ち廬（いおり）を樹（た）て、八家が之に居（す）む。是れ井田を為す。怠は疲なり。言ふは七十萬家は十萬の師を奉（まかな）うに、轉輸すに道路に疲れるなり。
梅堯臣曰く、糧を輸（はこ）び用に供す、公私に煩役し、道路に疲れ、耒耜に廢（すた）れる。曹說は是なり。
張預曰く、井田の法、八家が鄰を為し、一家が從軍せば、七家が之を奉う。兵十萬を興せば、則ち耕作を輟（や）む者七十萬家なり。或は問いて曰く、重地は則ち掠す、道路に疲れ而して轉輸すとは何ぞ？曰く、糧を運ぶを止むに非ず、亦、器用に供すなり。且つ兵が敵を掠すを貴しとすは、敵境を深踐すを謂い、則ち當に備え其れ乏しく、故に須べからく掠し以て食を繼ぐ、敵に館榖を專（もはら）にすに非ず。亦、磧鹵（塩分のある砂河原）の地有り、糧無き可因（場合に）、得て餉（おく）らざるか？

（相守數年，以爭一日之勝，而愛爵祿百金，不知敵之情者，不仁之至也）。
李筌曰く、爵賞を惜しみ、間諜に與えず、敵の動靜を窺めしむは、是れ不仁の至と為す。
杜牧曰く、厚利を以て間を使うこと能わざるを言う。
梅堯臣曰く、相守ること數年、則ち七十萬家が費す所は多ならん。而るに乃ち爵祿百金の微を惜しみ、間を遺り、情を酌み勝を取ること以てせざるは、是れ不仁の極みなり。
王晳曰く、財賞に恡（やぶさか）にして、間を用いざるなり。
張預曰く、相持し且つ久しくば七十萬家の財力は一に困す。此を恤（うれう）を知らず、而して反りて爵賞の細を靳惜（物惜しみ）し、間を啗（つ）り索を求め、敵情を知ることを以てせざるは、不仁の甚しきなり。

（非人之將也），
梅堯臣曰く、將、人に功を成す者に非ず。

（非主之佐也），一本に非仁之佐と作（す）なり。
梅堯臣曰く、仁を以て國を佐（たす）く者に非ず。

（非勝之主也）。
梅堯臣曰く、勝を致し主に利す者に非ず。
張預曰く、將を以て人とす可からず、佐を以て主とす可からず，主を以て勝とす可からず、勤勤而（断じて）言うは、之を嘆き惜しむ。

（故明君賢將，所以動而勝人，成功出於衆者，先知也）。
李筌曰く、間を為すなり。
杜牧曰く、敵情を知るなり。
梅堯臣曰く、主は妄動せず動けば、必ず人に勝つ。將は茍（かりそめにも）功せず、功は必ず衆に出ず、所以は何ぞや、敵情を預知すに在り。
王晳曰く、先ず敵情を知れば、勝を制すこと神の如し。
何氏曰く、『周官』「士師は邦諜を掌る」、蓋し異國間を伺うを謂う。故に兵家の有す四機二權、事幾を曰い、智權を曰い、皆て間諜者を善く用うなり。故に能く敵人の動靜、我預知せむ。韋孝寛（いこうかん）は驃騎大將軍と為り、玉壁を鎮す。孝寛は撫御（いつくしんで統率する）に善く、能く人心を得る。間諜を遣り齊に入る所は、皆て盡力を為す。亦齊人有りて孝寛に金貨を得、遙かに書疏（書状）を通ず。故に齊の動靜は、朝廷の皆て之を先知す。時に主帥の許盆有り、孝寛は心膂（心臓と背骨）を以て（非常に信頼して）委ね、一戍（国境）を守らしむも、盆は乃ち以て城東に入る。孝寛は怒り、諜を遣り之を取り、俄にして首を斬りて還る。其の能く物情に致ること此の致し。又、李達（りたつ）は都督，義州弘農等二十一防諸軍事と為り、毎（ことごと）く境外の人を厚撫し、間諜をして、敵中動靜、必ず之を先知なさしめる。事洩れること有れば誅戮さるに至り、亦、以て悔を為すことなし。其れ人心を得るや此の如し。
張預曰く、敵情を先知す、故に動きて則ち人に勝つ、功業は卓然（抜き出る）とし、群衆に超絕す。

（先知者，不可取於鬼神），
張預曰く、之を視て見ず、之を聽きて聞かず、禱祀（事に当り鬼神に禱求して祭祀すること）を以てす可からずして取る。

（不可象於事）。
曹操曰く、禱祀を以て求む可からず、亦、事類（同類の事）を以て求む可からず。
李筌曰く、鬼神や象類（似たような類い；夢のお告げなど）に取る可からず、唯だ間者は能く敵の情を知る。
杜牧曰く、象は類なり。他事と比類すを以て求む可からずを言う。
梅堯臣曰く、卜筮を以て知る可からず、象類を以て求む可からず。
張預曰く、事の相類（似た類い）を以てす可からずとは、擬象（現象をまねる）して求む。

（不可驗於度），
曹操曰く、事を數度を以てす可からず。
李荃曰く、度は數なり。夫れ長短、闊狹（寛狭）、逺近（遠近）、小大、即ち之を度數により驗（しる）す可し。人の情僞（まことといつわり）は、度（はか）りて知ること能わず。
梅堯臣曰く、度數を以て驗す可からず。先知の難を言う。
張預曰く、度數を以て推驗（推問検証）す可からずして知る。

（必取於知敵之情者也）。
曹操曰く、人に因るなり。
李荃曰く、間人に因るなり。
梅堯臣曰く、鬼神の情は卜筮を以て知る可し。形氣の物は象類を以を求む可し。天地の理は度數を以て驗す可し。唯だ敵の情は必ず間者に由りて而る後に知るなり。
張預曰く、鬼神、象類、度數の皆（により）、以て先知を求む可からず，必ず人に因りて而る後に敵情を知る。

（故用間有五，有因間，有內間，有反間，有死間，有生間）。
梅堯臣曰く、五間の名なり。
張預曰く、此れ五間の名、間に因りて當に鄉間と為すがごとし。故に下文に云く、「鄉間得て使う可し」と。

（五間俱起，莫知其道，是謂神紀，人君之寳也）。
曹操曰く、同時に五間を任用す。
李筌曰く、五間は、五人に因りて之を用う。
杜牧曰く、五間を俱（とも）に起こすは、敵人其の情を知らず、形を泄らし之を露（あらわ）にする道乃ち神妙（神奇巧妙）の綱紀（治理）、人君の重寳なり。
梅堯臣曰く、五間を俱に起すは、間を以て敵而して我が之を用う道を知ること莫し。是れ神妙の綱紀と曰う、人君の貴しとする所なり。
王晳曰く、五間を俱に起さば、人之を測らず、是れ用兵神妙の大紀、人主の重寳なり。
賈林曰く、紀は理なり。言うは、敵人但に我が何（いか）なる道を以て神理に通ずが如きを知ること莫きなり。
張預曰く、五間を循環して用いば、人は能く其の理を測ること莫し、茲れ乃ち神妙の綱紀、人君の重寳なり。

（因間者，因其鄉人而用之）。
杜牧曰く、敵の鄉國の人に因りて之を厚く撫（な）で、間と為さしむなり。晉の豫州の刺史祖逖（そてき）が雍丘を鎮すは、人下士を愛しみ、踈と雖も賤隸と交わり、皆て恩禮して之を遇す（彼等を礼遇した）。河上に堡を固め、先ず任有りて子胡に在るは、皆て兩屬（双方に属す）を聽（ゆる）す。時に游軍を遣り偽りて之を抄（かす）む。其の未だ附かざるを明らかにし、諸塢王は感戴（感激して首長と敬う）。胡に異圖有りて、輙（すなわ）ち密に聞を以てし、前後して剋獲（戦勝して捕虜を得る）すは、蓋し此に由る。西魏の韋孝寛（いこうかん）が齊人をして許盆を斬らしめに來る、猶其の義なり。
賈林曰く、間に因りて讀むを鄉間と為す。
杜佑曰く、敵の鄉人に因りて、敵の表裏虛實の情を知る、故に就きて之を用い、伺候（斥候）せしむ可し。
梅堯臣曰く、其の國人に因りて、利して之を使う。
何氏曰く、如し春秋ならば、時に楚師が宋を伐ち、九月服さず。將に宋を去らむとし、楚の大夫申叔時（しんしゅくじ）の曰く、「室を築き反りて耕やさば、宋は必ず命を聽く」と。楚子（楚王）は之に從う。宋人は懼れ、華元（かげん）をして夜に楚師に入らしめ、子反（しはん）の牀に登りて之を起こして曰く、「寡君は元をして病を以て告げしめて曰く、弊邑では易子而食（子を交換して食べ）析骸而爨（骨を折り薪にして炊事す）。然りと雖も、城下の盟、有（むす）べば以て國は斃（ほろ）ぶ、從うこと能わず。我を去ること三十里ならば、唯に命、是を聽かむ」と。子反懼れて之と盟し、而して楚子に告ぐ。三十里退く。宋は楚を平すに及ぶ（魯宣公15年夏5月条）。
張預曰く、敵の國人に因り、其の底裏を知り、就きて之を用い、伺候せしむ可し。韋孝寛は金帛を以て齊人に啗（くら）わし、而して齊人遙に書疏（書状）を通ずは是なり。

（內間者，因其官人而用之）。
李筌曰く、敵人の失職の官に因る。魏は許攸（きょゆう）を用う。
杜牧曰く、敵の官人、賢にして失職者有り、過にして刑を被（こう）むる者有り、亦寵嬖（お気に入りの家臣や女子）にして財を貪る者有り、屈して下位に在る者有り、使に任を得ざる者有り、敗に因りて喪い以て已が材能を展すを求めんと欲す者有り、飜覆（離反復帰）し變詐（巧變詭詐）し常に兩端の心を持つ者有り、此の如き官は、皆て可以潜かに通じ問遺（賄賂）し、厚く金帛を貺（あた）えて之と結び、因りて其の國中の情を求め、其の我を謀る事を察し、復（また）其の君臣を間（離間）し、和同せしめず。
杜佑曰く、其の官失職す者在るに因る。形戮の子孫の若し。與（とも）に罰を受く家なり。其の隙有るに因りて、就きて之を用う。
梅堯臣曰く、其の官の屬（たぐい）に因りて、結びて之を用う。
何氏曰く、如益州の牧（ぼく）羅尚（らしょう）將の隗伯（かいはく）を遣し蜀を攻める。賊の李雄（りゆう）は郫城に於て、互に勝負有り。雄は乃ち武都人の朴泰（ぼくたい）を募り、之を鞭ちて見血し（血にまみれ）、羅尚を譎（あざむ）かしめ、內應を為さむと欲（し）、火を以て期と為す。尚は之を信じ、悉く精兵を出し、隗伯等を遣し兵を率いて泰に從いて雄を擊つ。雄の將の李驤（りじょう）は道に伏（伏兵）を設く。泰は長梯を以て城に𠋣（よ）りて火を舉げる。伯軍は火を見て起ちて爭いて梯に縁り、泰は又繩を以て尚軍の百餘人を汲み上げ、皆て之を斬る。雄は因りて兵を放ち、內外之を擊ち、尚軍を大いに破る。此れ內間の勢を用うなり。又隋の隂壽（いんじゅ）は幽州總管と為り、髙寳寧（こうほうねい）が兵を舉げ反す。壽は之を討ち、寳寧は磧北に奔る。壽は班師（凱旋）し、開府に留り成道昻（せいどうこう）之を鎮（鎮圧）す。寳寧は其の子の僧伽率（そうかりつ）を遣し輕騎で城下を掠して去る。契丹靺鞨の衆を尋ね引いて來攻し、道昻が苦戰すること連月、乃ち退く。壽は之に患う。是に寳寧に重く賄（まいない）し、又、人を遣し隂に其の親任する所の者、趙世模（ちょうせも）、王威（おうい）等を間すこと月餘にして、世模は其の衆を率いて降る。寳寧は復（また）走（に）げ、契丹は其の麾下の趙修羅（ちょうしゅら）の殺す所と為り、北邊は遂に安んず。又、唐の太宗が竇建德（とうけんとく）を討ち、武牢に入り、其の營に進むこと薄くして、傷殺する所多し。凌敬（りょうけい）進みて說きて曰く、「悉く兵を濟河し、懷州河を攻め取るべし。陽は重將をして居守せしめ、更に衆を率い鼓を鳴らし旗を建て、太行を踰えて上黨に入り、先聲後實し（声威を前にして、武力を後ろにする）、撽を傳えて定め、壷口を漸趨（ゆっくり進み）、蒲津を稍駭し（わずかに驚かす）、河東の地を收むべし。此は策の上なり。行えば必ず三利有り、一に則ち無人の境に入り、師には萬全が有り。二に則ち土を拓きて兵を得る。三に則ち鄭の圍は自から解かる」と。建德は將に之に從う。王世充（おうせじゅう）の使長孫安世（ちょうそんあんせ）に隂（ひそか）に金玉を齎（もたら）し、其の諸將に啗（くらわ）し、以て其の謀を亂す。衆咸（みな）進みて諌めて曰く、「凌敬は書生のみ。豈に言を與にして戰う可きか？」と。建德は之に從い、退きて敬に謝して曰く、「今衆心は甚だ𨦣（鋭）く、此れ天は我に贊せむ（力を与える）。此に因りて決戰せば、必ず然り大いに捷（か）たむ。巳に衆議に依りて、公の言に從うことを得ず」と。敬は固より爭（いさ）む。建德は怒りて、扶して出馬す。是に悉く衆は進みて武牢に逼（せま）る。太宗は按甲して（武装を解いて）其の𨦣を挫く。建德中ば搶し（先を争い）、牛口渚に竄（のがれかく）れる。車騎將軍の白士讓（はくどじょう）は武威を楊げて之を生け獲る。又王翦（おうせん）は秦將と為りて趙を攻め、趙は李牧（りぼく）、司馬商（しばしょう）をして之を禦かしむ。李牧は數（しばしば）秦軍を破走し、秦將の桓齮（かんき）を殺す。翦は之を惡（にく）み、乃ち多く趙王の寵臣の郭開（かくかい）等に金を與え、反間を為さしめて曰く、「李牧、司馬商は秦と趙を廢せむと、以て多くを取りて秦に封じむと欲す」と。趙王は之を疑い、趙葱（ちょうそ）及び顏聚（がんしょう）をして將を伐ち、李牧を斬り、司馬商を廢せしむ。後三月に、翦は因りて趙を急擊し、大いに破り、趙葱を殺し、趙王遷（せん）及び其の將顏聚を虜（とりこ）にす。
張預曰く、其の失意の官、或いは刑戮の子弟、凡そ隙有る者に因り、厚く利して之を使う。晉が析公（せきこう）を任じ、吳が子胥（ししょ）を納むは、皆て之に近し。

（反間者，因其敵間而用之）。
李筌曰く、敵に間有りて來りて我が得失を窺う。我は之を厚く賂う、而して反りて我が間と為らしむ。
杜牧曰く、敵に間有りて來りて我を窺わば、我は必ず先に之を知り、或いは厚く賂いて之を誘い、反りて我が用と為す。或いは不覺と佯為（みせか）けて、以て偽情を示して之を縱（はな）つ、則ち敵人の間は反りて我が用と為す。陳平（ちんぺい）初めて漢王の護軍尉と為る。項羽は滎陽城に圍み、漢王は之に患い、滎陽以西を割きて和すを請う。項王は聽かず。平が曰く、「楚を顧れば亂す可き者有り。彼の項王の骨鯁（正直、剛健）の臣は、亞父（范増；はんぞう）、鍾離昧（しょうりばつ）、龍且（りゅうしょ）、周殷（しゅういん）の屬（たぐい）數人に過ぎずのみ。大王が能く數萬斤金を出捐し（金を出し利を与え）、反間を行はば、其の君臣を間し、以て其の心を疑おう。項王は人と為り、意忌（猜疑し）信讒（讒言を信じる）にして、必ず內に相誅す。漢が因りて兵を舉げて之を攻めば、楚を必ず破らむ」と。漢王は以て然りと為し、乃ち黃金四萬斤を出して平に與え、恣所為（思い通りにやらせ）、出入不問とす（自由に出入りさせる）。平は旣に多く金を以て楚軍に反間を縱（はな）ち、諸將に宣言す、「鍾離昧等は項王の為（ため）に將に功多からむ、然るに終（つい）に地を裂きて王たるを得ず。漢と一と為り、以て項氏を滅し、王の其の地を分かたむと欲す」と。項王は果して之を疑う。使をして漢に至らしむ。漢は太牢の具（豪華な料理）を為し、舉げて進（たてまつ）り、楚使と見ると即ち陽驚して（わざと驚いて）曰く、「吾は亞父が使と以為（おも）えば、乃ち項王が使なり」と。複（また）持ち去り、惡草具（粗末な料理）を以て楚使に進る。使は歸りて、具（つぶさ）に以て項王に報ず。果して大いに亞父を疑う。亞父は急ぎて榮陽城を擊ち下さむと欲（し）、項王は信じず。亞父に聽くこと肯（がえん）ぜず（あえて聞かず）。亞父は項王と聞（離間）し之を疑い、乃ち大いに怒り、疽を發して死す。卒（つい）に陳平の計を用いて楚を滅す。
梅堯臣曰く、或いは以て事を偽りて之に紿（あた）う、或いは以て利を厚くして之に啗（くら）わす。
王晳曰く、反間は反りて我為に間すなり。或いは之を留め其の情を言わしむ、又、或いは示すに詭形を以てし之を遣わす。
何氏曰く、如燕の昭王は以て樂毅（がっき）を將と為し、齊の七十餘城を破る。惠王が立つに及（いた）り、樂毅と隙有り。齊將の田單（でんたん）乃ち燕に反間を縱ち、宣言して曰く、「齊王巳に死す。城を拔かざるは、二つのみ。樂毅は誅を畏れて敢えて歸らず、以て齊を伐ちて名を為すも、實は兵を連ね南面して齊に王たらむと欲（す）。齊人は未だ附かず、故に且（また）即墨を緩（ゆる）くし、以て其の事を待つ。齊人の戍（守備兵）の懼るは、唯に、他將が即墨に來りて殘（毀壞）すを恐れむ」と。燕王は以て然りと為し、騎劫（きごう）をして樂毅に代えしめ、燕人の士卒は離心す。單は、又、反間を縱ちて曰く、「吾は燕人が吾が城外の冢墓を掘り、先人を戮辱すを懼ろ」と。燕軍は之に從う。即墨の人は激怒して請いて戰い、大いに燕師を破り、亡した所の七十餘城を悉く之を復す。又、秦師が趙の閼與を圍む。趙將の趙奢（ちょうしゃ）之を救う。趙國都を去ること三十里にして進まず。秦の間が來り、奢は善く食わして之を遣わす。間は以て秦に報ず、將に奢師は怯弱にして止り行がざるべしと以為（おも）はる、と。奢は隨りて秦師に卷甲趨（軽装で快走）し、之を擊破す。又、范睢（はんしょ）秦の昭王の相と為り、左庶長の王齕（おうこつ）をして韓を攻めしめ、上黨を取る。上黨の民は趙、趙軍の長平に走（に）げ、齕は因りて趙を攻む。趙は廉頗（れんぱ）をして將とし、廉頗は壁を堅くし以て秦を待ち、秦は數（しばしば）戰を挑むも、趙兵は出でず。趙王は數（しばしば）（戦わないことを）讓（せめ）むと以為（おも）う。而して睢は使人をして趙に千金を行いて反間を為して曰く、「秦が惡（にく）む所、獨り趙括（ちょうかつ）を畏るのみ。廉頗の軍は與（くみ）易く、且（また）降らむ」と。趙王は旣に廉頗軍が多くを亡失し、數敗れ、又、反りて壁を堅くして戰わざるを怒り、又、秦の反間の言を聞き、因りて括をして頗に代えせしむ。秦は括が將と聞きて、白起（はくき）を以て上將軍と為し、括を射殺し降卒四十萬を坑（生き埋め）すに及（いた）る。
張預曰く、敵に間有りて來れば、或いは重く賂し厚禮以て之と結び、告ぐに偽辭を以てす、或いは佯為不知（知らないふりをし）踈（無視し）而して之を慢し（油断させ）、以て虛事を示し、之をして歸報せしむ、則ち反りて我が利と為す。趙奢（ちょうしゃ）は善く秦間に食わせ、漢軍佯（いつわ）りて楚使を驚かすは、是なり。

（死間者，為誑事於外，令吾間知之，而傳於敵間也）。
李筌曰く、情詐りて信ずに足らず、吾が之を知れば、吾をして動かしむ。間して之を待つ。此れ筌は待字を以てし傳に非ずと為（す）。
杜牧曰く、誑は詐なり。言うは、吾が間が敵に在り、未だ事情を知らず。我は則ち詐りて事跡を立て、吾が間をして其の詐迹に憑（よ）らしめ、以て敵に輸誠して（偽の事績に従って誠心をよそおい）敵の信を得る。若し吾が進取し、詐跡と同じでなくば、間者は脫すこと能わず、則ち敵の殺す所と為る、故に死間と曰う。漢王は使酈生（酈食其;れきいき）をして齊を說かしめ、之を下す。齊は守備を罷む。韓信因りて之を襲う。田橫は怒りて酈生を烹（かまゆで）す、此の事が相い近し。
杜佑曰く、誑詐の事を外に作し、佯りて之を漏泄（秘密を漏らすが如く偽り）、吾が間をして之を知らしめる。吾が間は敵中に至り、敵の得る所と為り、必ず誑事を以て敵を諭す。敵は從いて之に備うも、吾が行く所然らずんば、間は則ち死せむ。又云敵間來りて我が誑事を聞し、以て持ち歸るも、然り皆て圖る所に非ざるなり。二間皆て幽隱深密を知ること能わず、故に死間と曰う。蕭世誠（しょうせいせい）曰く、敵人に獲（とら）われる所及び以て亡（逃亡）軍士、重罪有りて繫れる者と判（わか）れば、故に貸（ゆる）して免じ、泄らす勿れと相い勑して、佯りて秘密にせず、敵間をして之を竊い聞せしむ。吾は因りて之を縱ち亡（逃亡）せしむ。亡せば必ず敵に歸り、必ず信ぜむ。往けば必ず死ぬ。故に死間と曰う。
梅堯臣曰く、誑を以て敵に告げ、事乖（もと）れば必ず殺さる。
王晳曰く、詐を吾が聞きて、敵をして之を得さしめ、間が吾が詐を以て敵に事を告げば、決（結果）は必ず之を殺すなり。
何氏曰く、戰國の鄭武公が胡を伐たむと欲（す）が如し。先ず其の子を以て胡に妻（めあ）わす。因りて群臣に問いて曰く、「吾は兵を用いんと欲（す）、誰を伐つ可き者か？」。大夫の關思期（かんしき）曰く、「胡とす可し」と。武公は怒りて之を戮（ころ）して曰く、「胡は兄弟の國、子（し）が之を伐てと言うは何ぞ？」と。胡君は之を聞き、以て鄭を親と為す。已にして鄭に備えず、襲いて之を取る。此れは死間の類を用うなり。又班超（はんちょう）于闐諸國を發し、兵は莎車、龜茲二國を擊つも兵少くして、敵は罷散（退散）せずと揚言（公言）し、乃ち生口を隂緩す（逃走させる）。歸りて以て龜茲に告げ、王は喜びて虞（おもんばか）らず。超は即ち潜に勒兵し（兵を整え）莎車に馳赴（急行）し、大いに破り之を降す。斯れ亦死間の勒に同じ。又李靖（りせい）が突厥を伐ち、頡利可汗（けつりかがん）は唐儉（とうけん）を以て先ず突厥に在りて和親を結び、突厥は備えず。靖は因りて之を掩擊（急襲）して破る。
張預曰く、敵人をして其の賢能を殺さしめむと欲（す）、乃ち死士に虛偽を持して以て之に赴かしむ。吾が間が敵に至り、彼の為に得る所、彼が誑事を以て實と為さば、必ず俱に之を殺す。我が朝曹の大尉は嘗て人に死を貸し、偽りて僧と為さしめ、吞蠟彈（とんろうだん？）西夏に入り、至れば則ち其れ囚わる所と為り、僧は以て彈に告げ、即ち之を下し、開きて讀み、乃ち彼の謀臣に遺（つかわ）す所の書なり。戎主は怒りて其の臣を誅し、并せて間の僧を殺すは、此れ其の義なり。然り死間の事は一に非らず、或いは吾が間をして敵に詣で和を約せしめ、我は反りて之を伐る、則ち間者は立死す。酈生（れきいき）が齊王に烹（かまゆで）さる、唐儉（とうけん）が突厥に殺さるは、是なり。

（生間者，反報也）。
李筌曰く、往來の使。
杜牧曰く、往來し相通報すなり。生間は、必ず內に明外に愚を取る、形は劣るも心は壯、趫捷勁勇（身軽で強く勇気のあること）、鄙事には閑し（どうでもよいことにはぼんやりと処し）、能く饑寒垢恥を（飢え寒さ、垢にまみれ辱められるも）忍（しの）ぶは之を為す。
賈林曰く、身は則ち公を行い、心は乃ち私（ひそか）に覘（うかが）い、往けば反りて報ず、復（また）常に害さる所無し。故に生間と曰う。
杜佑曰く、巳（己）が賢材智謀能有るを擇び、敵の親貴と開通すにより、其の動靜を察し、其の事を知り彼の為す所を計り、已に其の實を知れば、還りて以て我に報ず。故に生間と曰う。
梅堯臣曰く、智辨の者をして往きて其の情を覘いて以て歸りて報ぜせしむなり。
何氏曰く、華元（かげん）が子反（しはん）の牀に登りて歸るが如し。又、如隋の達奚武（たつけいぶ）東秦刺史と為り、時に齊の神武（しんぶ）が沙苑に趣く。太祖は武を遣わし之を覘う。武は三騎を從がえ、皆て敵人の衣服を衣せ、日暮に至り、營を去ること數百歩にして下馬し潜に聽き、其の軍號を得る。上馬に因りて歷營し、警夜者の若し。不如法者（規律に従わない者）有れば往往に之を撻（むちう）ち、具（つぶさ）に敵の情狀を知り、以て太祖に告ぐ。太祖は深く嘉（よみ）し、遂に之を破る。
張預曰く、智能の士を選び、往きて敵情を視、歸りて以て我に報ず。婁敬（ろうけい：劉敬）匈奴の強きを知り、以て髙祖に告ぐるが類の若し。然る生間の事亦衆し。或いは已に退かむと欲（し）、敵に以て戰わむと告ぐ。或いは巳（己）は戰わむと欲（し）、以て退かむと敵に告ぐ。若秦の行人が夜に晉師に戒して曰く、「來日に相い見ゆを請う」と。臾駢（ゆへい）が曰く、「使者の目は動きて言は肆（でまかせ）、我を懼るなり」と。秦は果して夜に遁れる。又呂延（りょえん）は乞伏乾歸（きくぶつけんき）を攻め、大いに之に敗れる。乾歸は乃ち間を遣わし、東に成紀に奔ると稱し、延は信じて之を追う。耿稚が曰く、「告ぐる者は髙を視て（顔）色が動く、必ず姦計有り」と、延は從わず、遂に敗れる所と為るは是なり。

（故三軍之事，莫親於間）。
杜牧曰く、受辭指蹤（君主の命を受けて指揮す）は、臥內（君主の内室）に在り。
杜佑曰く、若し親撫せずんば以て祿賞重きも、則ち反りて敵の用と為り、我が情實を洩らす。
梅堯臣曰く、幄に入り詞を受くは、最も親近と為り。
王晳曰く、腹心を以て親しく之と結ぶ。
張預曰く、三軍の士、然り皆て親撫す。獨り間者には、腹心を以て相い委ね、是れ最も親密と為（す）なり。

（賞莫厚於間），
杜佑曰く、重賞を以て之を賞す、而して其の用頼し。
梅堯臣曰く、爵祿金帛、我は愛（お）しむこと無からむ。
王晳曰く、軍功の賞、此より厚きは莫し。
張預曰く、髙爵厚利に非らずんば、間を使うこと能わず。陳平（ちんぺい）が曰く、黃金四十萬斤を出すを願いて楚の君臣を間す。

（事莫密於間），
杜牧曰く、口に出でば耳に入るなり。密を一に審に作（な）す。
杜佑曰く、間事は密ならずんば、則ち已に害を為す。
梅堯臣曰く、幾事は密ならずんば、則ち害を成す。
王晳曰く、獨り將に謀を與こすべし。
張預曰く、惟れ將に間と得て其の事を聞かんとす、密に非らざるか。

（非聖智不能用間），
杜牧曰く、先ず間者の性の誠實多智を量り、然して後に之を用う可し。厚貌にして深情たるや山川より險し、聖人に非らずんば能く知ること莫し。
梅堯臣曰く、其の情偽（まことといつわり）を知り、其の邪正を辨（わきまえ）ば、則ち能く用う。
王晳曰く、聖通して先識ならば、事に智明なり。
張預曰く、聖とは則ち事に通ぜざること無く、智なれば則ち幾先を洞照す、然して後に能く間事を為す。或に曰く、聖智なれば則ち能く人を知る。

（非仁義不能使間），
陳皥曰く、仁者は恩有りて以て人に義を及ぼす者、宜を得て事を制す。主は將に旣に能く仁で結びて義で使えば、則ち間者は心を盡して覘察し、樂（よみ）して我が用を為す。
孟氏曰く、太公の曰く、「仁義が著（あら）われば則ち賢者が之に歸す」と。賢者が之に歸さば、則ち其の間を用う可し。
梅堯臣曰く、之を撫（な）でるに仁を以てし、之に示すに義を以てせば、則ち能く使う。
王晳曰く、仁が其の心を結び、義が其の節を激（ふるいたた）す。仁義が人を使わば、何くんぞ可ならざる有りや。
張預曰く、仁なれば則ち爵賞を愛（お）しまず。義なれば則ち果決して（決断が素速く）疑い無し。旣に啗（くらわ）すに厚利を以てし、又、待（はべ）るに至誠を以てせば、則ち間者は力を竭（つく）す。

（非微妙不能得間之實），
杜牧曰く、間は亦財寳に利有り、敵の實情を得ず、但に將に虛辭以て我が約と赴（つ）ぐ、此れ須べからく心の淵妙（深奥玄妙）を用い、乃ち能く其の情偽虛實を酌むべし。
杜佑曰く、意密を用いて漏らさず。
梅堯臣曰く、間が反し敵の使う所と為すを防ぐは、思慮すに故（ことさら）に幾微臻妙（かすかな兆候を神妙にとらえる）すべし。
王晳曰く、謂うは、間者は必（ふくつ）に性識は微妙、乃ち能く間の事實とする所を得るべし。
張預曰く、間は利害を以て來りて告ぐ、須べからく淵微精妙を用心すべし、乃ち能く其の真偽を察すべし。

（微哉微哉，無所不用間也）。
杜牧曰く、言うは、毎事に皆て須べからく先知すべし。
梅堯臣曰く、微の又微、則ち何ぞ知らざる所。
王晳曰く、丁寧の當、事事に敵の情を知る。
張預曰く、密の又密、則ち事に巨細無く、皆て先知すなり。

（間事未發而先聞者，間與所告者皆死）。
杜牧曰く、告ぐ者は間を誘う者に非ず、則ち間者の情を知ることを得ず。之を殺して可なり。
陳皥曰く、間者が未だ其の事を發せず、人有りて來りて其の聞を告ぐは、告ぐ所の者亦間者と俱に殺し以て口を滅し、敵人に之を知らしむこと無れ。
梅堯臣曰く、間者を殺すは、其の泄（もらす）を惡（にく）む、告者を殺すは、其の言を滅す。
何氏曰く、兵の謀は大事、泄す者は當に誅（ころ）すべし。告ぐ人も亦殺せ、諸衆に傳わるを恐る。
張預曰く、敵の事を間し、謀を定め未だ發せずして、忽（にわか）に聞者有りて來りて告ぐ。必ず間と俱に之を殺すの一は、其の泄を惡む、一は其の口を滅す。秦は已に趙を間し、廉頗を用いず、秦は乃ち白起（はくき）を以て將と為し、軍中に令して曰く、「武安君を洩らす將有るは、斬れ」と。此れ是れ已に其の事を發して、尚泄らすを欲せず、況や未だ發せずをや。

（凡軍之所欲擊，城之所欲攻，人之所欲殺，必先知其守將、左右、謁者、門者、舎人之姓名，令吾間必索知之）。
李筌曰く、其の姓名を知れば、則ち取り易し。
杜牧曰く、凡そ攻戰せむと欲（せ）ば、先ず須べからく敵の用う所の人の賢愚巧拙を知るべし、則ち材を量り以て之に應ず。漢王は韓信（かんしん）、曹參（そうさん）、灌嬰（かんえい）を遣わし魏豹（ぎひょう）を擊つ、問いて曰く、「魏の大將は誰か？」と。對えて柏直（はくちょく）と曰く。漢王の曰く、「是れ口は尚乳臭く、韓信に當ること能わず（若造で韓信の敵ではない）」と。騎將は誰か？と。馮敬（ひょうけい）と曰く。曰く、「是れ秦將の馮無擇（ひょうぶたく）の子なり、賢と雖も、灌嬰に當ること能わず」と。歩卒の將は誰か？項它（こうだ）と曰く。曰く、「是れ曹參に當ること能わず、吾に患無からむ」と。
陳皥曰く、此れ敵人の左右の姓名を言う、必ず須べからく我が先に之を知るべし、或いは敵に間を來さしめ、我は當に間を去らしむべし。若し其の左右姓名を知らずんば、則ち間者の說（得）を成すこと能わず。漢の髙（祖）が秦を伐つに嶢關に至る。張良が曰く、「吾は其の將は賈竪（商人）と聞くのみ、利を以て之に啗わす可し」と。又曰く、「其の將は欲して和すと曰うと雖も、其の軍士は未だ肯（がえん）ぜず、其の懈に因りて之を擊つに如ず（将は懐柔できても軍士は納得しておらず、油断している所を攻撃するがよい）」と。乃ち兵を進め之を擊破す。又宋の華元（かげん）は夜に子反（しはん）の牀に登り、以て宋が病めりと告ぐ。若し素より門人、舎人、左右姓名を知り、先に間をして之に導かしむるに非ずんば、又何に由りてか得て其の床に登らむや。
杜佑曰く、守は官守の軄任（任務）者を謂う、謁は告なり、主に事を告ぐ者なり。門は、門を守る者なり。舎人は、舎を守る人なり。必ず先に之を知り、親舊（なじみ）と為し、急有れば則ち之を呼べば、則ち知らざる可からず（なんでも分かる）。亦此に因りて敵の情を知る。
梅堯臣曰く、凡そ敵の左右、前後の姓名、皆て須べからく審省（詳細省察）すべし而して令吾が間に先知せしめば、則ち吾が間行う可からむ（行動することが出来る）。
王晳曰く、事に臨みて求む可からず。
張預曰く、守將は、官の任軄を守る將なり。謁は、賓客を典（つかさど）る官なり。門は、閽吏（守門の小吏）なり。舎人は、守舎の人なり。凡そ其の軍を擊たむと欲（し）、其の城を攻めむと欲（し）、其の人を殺さむと欲（せ）ば、必ず先に此の左右の姓名を知れば、則ち可なり。其の軍に潜入せんむと欲ば、則ち其の姓名を呼べば而して往（ゆ）く。華元が夜に子反の牀に登り以て宋病めりと告ぐが若（ごと）し，杜元凱（杜預；どよ）註に此文を引くは、元が此の術を用うを謂う。以て自ら通ずを得るは是なり。又漢の髙祖が韓信の臥內に入り、其の印を取るは、亦之に近し。

（必索敵人之間，來間我者，因而利之，導而舎之），
杜佑曰く、舎は居止（居住）なり。吾人を遺（つかわ）すに重利を以てし、復（また）遇して之を舎せしめば、則ち其の辭を詭（たぶらか）せしむ可し。
（故反間可得而用也）。
曹操曰く、舎は居止なり。
杜牧曰く、敵間の來たらば、必ず誘うに厚利を以てし之を止舎し、我の反間と為さしむ。
杜佑曰く、故に能く敵の間を取りて之を用う。
梅堯臣曰く、必ず敵の來間者を探索して知り、因りて而して利して之を誘い、引きて之を舎止し、然る後に可我が反間と為すなり。
王晳曰く、此れ敵の間を留め、以て其の情を詢（たずね）る者なり。必ず謹しみて之を舎し、曲げて辯說を為し、深く情愛を致し、然る後に啗わすに大利を以てし、威すに大刑を以てせば、自ら其の君王者に忠を至すに非ずして、皆て我が用と為らむ。
張預曰く、索は求なり。敵間が來りて我を窺う者を求め、因りて厚利を以て誘導し之を館舎し、反りて我が間と為さしむ。之を舎すと言うは、其の使を稽留（滞留）すを謂う。淹延（えんえん）と旣に乆（ひさ）しくば、論事すこと必ず多く、我は因りて得て敵の情を察す。下文に言う「四間皆因反間而知」は、乆しく其を人留むこと非ずば、其の事を極めて論ずに、則ち何んぞ以て悉く知らむや。
（因是而知之，故鄉間內間可得而使也）。
杜牧曰く、若し敵間を利を以て之を導き、尚、我が反間と為さしむ可し。此に因り乃ち厚利を知り、亦鄉間內間を使う可し。此れ言うは、間を使うに利に非ずんば可ならず。故に上文に云く、「相守數年，爭一日之勝，而愛爵祿百金，不知敵情者，不仁之至也。」下文は皆て其の義は同じなり。
陳皥曰く、此の說は踈（大雑把）なり。言うは、敵が間を來さしめば、利を以て之に啗わし、誘いて舎に止めしめ、因りて敵之情を得、因りて內間を間し、反間に使う可く、誘うに之を使う。
杜佑曰く、敵間反すに因りて敵情を知り、鄉間は皆て得て使う可し。
梅堯臣曰く、其の國人の使う可き者、其の官人の用う可き者、皆て反間に因りて之を知る。
張預曰く、是の反間に因りて、彼の鄉人の利を貪る者，官人の隙の有る者を知りて、誘いて之を使う。
（因是而知之，故死間為誑事，可使告敵）。
張預曰く、是の反間に因りて、彼が誑る可き事を知り、死間をして往きて之を告げしむ。
（因是而知之，故生間可使如期）。
杜牧曰く、往來をして期の如くせしむ可し。
陳皥曰く、言うは、五間は皆て循環すること相い因る、惟だ生間は期の如くせしむ可し。
杜佑曰く、誑事に因りて敵情を知り、生間は往きて返る。其の敵の腹心の所在を知らしむ可し。
梅堯臣曰く、吾が間をして誑を以て敵に告げしむは、須べからく反間に因りて敵を誑かす可きを知る。生間は利害を以て敵情を覘い、須べからく反間に因りて知るべし。其の踈密にして則ち往きて實を得る可し、而して歸ること期すが如し。
張預曰く、是の反間に因りて彼の情を知る、故に生間は往復すこと期すが如くす可し。
（五間之事，主必知之）。
李筌曰く、孫子が五間に殷勤（ねんごろ）たること、主は切に之を知るべし。
（知之必在於反間，故反間不可不厚也）。
杜牧曰く、鄉間、內間、死間、生間，四間は、皆て反間に因りて敵情を知る、而して能く之を用う。故に、反間は最も切に厚からざる可からず。
杜佑曰く、人の主は、當に五間の用を知るべし、其の祿を厚くし、其の財を豐かにし、而して反間は又五間の本であり、事の要（かなめ）なり。故に、當に厚待在る（厚く待遇す）べし。
梅堯臣曰く、五間の始、皆て反間に因緣す、故に當に之を厚遇すべし。
張預曰く、人の主は、當に五間を用い以て敵情を知るべし。然して五間は皆て反間に因りて用う、則ち是れ反間は、豈に厚待せざる可からずや。
（昔殷校：宋人出版品為避宋太祖父親趙弘殷之諱，殷缺末筆。之興也，伊摯在夏），
曹操曰く、伊摯は伊尹なり。
（周之興也，呂牙在殷）。
曹操曰く、呂牙は太公なり。
梅堯臣曰く、伊尹、呂牙は國に叛くに非ず。夏は任ずこと能はわずして殷が之を任ず。殷は用いること能わずして周が之を用う。其れ大功を成すは、民の為なり。
何氏曰く、伊呂は聖人の耦（たぐい）、豈に人間と為すかな。今、孫子が之を引くは、五間の用を言い、須べからく上智の人、伊呂が才智の如きは、以て間を用う可し。蓋し之を重す辭のみ。
張預曰く、伊尹は夏の臣なり、後に殷に歸す。呂望は殷の臣なり、後に周に歸す。伊呂は湯武に相す、兵を以て天下を定むは、天に順い人に應ずなり。伯州犁（はくしゅうり）が楚に奔り、苗賁皇（びょうふんこう）が晉に適き、狐庸（こよう）が吳に在り、士會（しかい）が秦に居すとは同じに非ず。
（故惟明君賢將，能以上智為間者，必成大功。此兵之要，三軍之所恃而動也）。
李筌曰く、孫子の兵を論ずに、計に始まりて間に終るは、蓋し、攻を以て主と為さず、將と為るは者之を慎まざる可きや（慎め）。
杜牧曰く、敵情を知らずして、軍は動く可からず。敵の情を知るに間に非ずんば不可。故に曰く「三軍の恃みて動く所」と。李靖が曰く、「夫れ戰の勝を取る、此れ豈に天地に求むや、在るや人に因りて以て之を成す。古人の間を用うを歷觀せば、其れ妙は一に非ず、即ち間其の君に有る者、間其の親に有る者、間其の賢に有る者、間其の能に有る者、間其の助に有る者、間其の鄰好に有る者、間其の左右に有る者、間其の縱橫に有る者。故に、子貢、史廖、陳軫、蘇秦、張儀、范睢等、皆て此に憑きて功を成すなり。且（また）間の道に五つ有り。其の邑人に因りて有り、潜に伺察、致辭（報告）せしむ。其の仕子に因りて有り、故に虛假（偽情報）を洩らし、告示せしむ。敵の使に因りて有り、其の事を矯（まげ）て之に返す。賢能を審擇（審察選擇）す有り、彼をして向背虛實を覘（うかが）わせ之を歸りて說（と）かせしむ。佯りて罪を緩めて戾す有り、微に我が偽情浮計を漏らし、之を亡報せしむ。凡そ此の五間、皆て須べからく隱秘すること之を重くし、以て賞すこと之を密にして又密、始めて行うこと可ならむ。若し敵に寵嬖（寵愛者）有らば、任ずに腹心を以てすは、我當に間をして其の珍玩（重宝する物）を遺（つかわ）し、其の欲す所を恣（ほしいままに）し、順いて旁に之を誘わしむ。敵に重臣にして勢を失い其の志滿されざる者有らば、我は則ち啗わすに厚利を以てし、相を詭（あざむ）き親しく附（したが）い、其の情實を採り、而して之を敵に致しむべし。親貴左右にして、多辭で誇誕（誇大虚妄）、好みて利害を論ず者有らば、我は則ち間をして情を曲げ尊奉し、厚く珍寳を遺し、其の間する所を揣（おしはか）りて之を反間せしむ。敵が若し我に使聘せば、我は則ち其の使を稽留し、人をして之と共に處らしめ、矯して殷勤を致し（相手を持ち上げ）、偽りて相親暱し（昵懇にし）、朝夕に慰諭し（言い聞かせ）、珍味を倍供し、其の辭色を觀て之を察し、仍りて朝夕に使獨り巳と伴に居らしめ、聦耳者（聴覚のよい者）を遣わし複壁（二重の壁）中に潜めて之を聽かしめ、使が旣に遲違（ぐづぐづ）せば、彼を恐れさせ恠責す（なじる）、必ず是れ竊論心事、我は事を知りて、計りて遣わし之を用いしむ。且（また）夫れ間を用い人を間せば、人亦間を用い以て巳を間す。巳が以て密に往（や）れば、人は以て密に來る。理は須べからく獨り心に察し、事に參會（斟酌総合）せば、則ち失わず。若し敵人が來りて我が虛實を候い、我が動靜を察し、事計を覘い知らむと欲（し）、而して其の間を行うは、我は當に佯りて不覺と為し、舎に止め善く之に飯わし、微に以て我は言を偽り事を誑（たばか）り、示すに以て期會を前卻し（時期を前後す）、則ち我の須べき所、彼の失う所と為すは、其れ間有るに因りて之を反間にす。彼若し將に我が虛を以て實と為さば、我は即ち之に乗りて志を得む。夫れ水は能く舟を濟す所以なれど、亦水に因りて覆沒する者有り。間は能く功を成す所以なれど、亦間に憑きて敗に傾く者有り。若し髪を束ね主に事（つか）え、當に朝すに色を正し、忠すに以て節を盡し、信すに以て誠を竭し、詭伏（奸詐して隱藏し不露）せず以て自容（自己得以容身）し、權宜せず（適当ではなく）以て利を為せば、善き間有りと雖も、其れ用う可きか？」
陳皥曰く、晉の伯州犁（はくしゅうり）楚に奔り、楚の苗賁皇（びょうふんこう）晉に奔る。晉楚が鄢陵に合戰するに及び、苗賁皇在は晉侯の側、伯州犁は楚王に侍す。二人は各（おのおの）舊國の長短の情を言い、然して則ち晉が楚に勝つ所以は、楚が敗れる所以は、其の故は何ぞ？二子に則ち優劣有り。是れ間を用う道を知り、敵の情を間し、得て愼しみて其の人を擇ばずば、其の說を深究するや？故に上文に云く、「聖智に非ずんば、能く間を用う者莫し」と。夫れ聖智は人を知り、人は即ち之に附く、賢者は知を受け、則ち力を戮し效を為す。聖に非ず智に非ずんば、必ず猜し必ず忌み、公道は啟（ひら）かず、仁義は施されず、則ち義士賢人は因りて銜憤す（恨みを抱く）。此れ將に上天は祐（たす）けず。幽は鬼神に有り、設くに人事の變無し、恐れ隂誅の禍に有り。豈に上智の士其の用為すかな？故に上文に云く、「仁義に非ずんば、能く間を使うこと莫れ」と。然して則ち湯武の聖、伊呂を用うべし、伊呂は用を獲て、事必ず濟るべし。聖賢一たび會えば、交り泰（やす）らけく時に乗り、道は乾坤に合い、功は寰宇（天下四方）に格（いた）る。當に其れ夫を畎畆（田舎）に耕し、叟を渭濵に釣り、我を知るは、誰か能く念無きか（必ず吾を知る）。賈林曰く、軍に五間無くば、人の耳目無きが如きなり。
王晳曰く、未だ敵情を知らずんば、動く可からず。
張預曰く、師を用う本は、敵情を知るに在り。故に曰く、「此れ兵の要なり」と。未だ敵情を知らずんば、則ち軍を舉ぐ可からず。故に曰く、「三軍恃む所にして動くなりと。」然り十三篇の末に處くは、蓋し非兵の常を用うなり。戰攻形勢虛實の類を計るが若きは、兵動けば則ち之を用い、火攻と間に至れば、則ち時有りて為すのみ。